

## 利棕（とくら）の松

式内利棕神社は、男宮女宮からなっており、もと利棕峠に鎮座しておられた。

昔、敦賀の角上与平の娘が良縁あって阿蘇のある民家へ嫁入りした。ところが夫婦の折り合いが悪く実家へ戻って来た。けれども世間体も悪いので、また思い直して嫁入り先へ帰った。ところがやっぱり夫婦の間がおもしろくいかず、また実家へ戻るといふ始末で両親の心配も並大抵ではなかった。娘をなだめて、また思い直して行くかと思うとしばらくして戻ってくる。

娘はその都度、この峠に休んでは身の不運を嘆き悲しんだ。そのうち母親は、この心配がもとで亡くなった。父も娘も今は思案にくれて十度目に世間の手前も恥ずかしくて、夜になって人目を避け、娘を連れてこの利棕峠まで来た。そして父娘は男松・女松の二本の小枝を神前に供えて、嫁入り先の夫婦の和合と幸福を祈願し、「もしこの願いを叶えてくれるなら、この松の小枝に根ができ、今度こそは嫁入り先から帰ることがないように」と夫婦の行末を心をこめてお祈りして、お供えした松の小枝2本を地面に挿した。ところがこの松の小枝は願いの通り、根がすくすくと成長して天を仰ぐ大木となった。その後、娘夫婦は円満和合して幸せに暮らしたとのことである。

十度この峠を越え、行ったり帰ったりしたので、「とくら」（十返り）の松と伝えられている。

もと利棕明神は、利棕峠の男松・女松の巨木を神として祀ったので社殿は無かった。その松も男松の方は明治4年5月18日の夜、南の台風が吹いて倒れてしまったので今ある木は、それから後にできた松であるという。

「郷土誌 阿曾」より抜粋